

「まふいとヨルの日常パート③」

——まふい、甘えることを覚える——

朝。ヨルファミリア本部。

「……ん」

ヨルが目を覚ます。まだ眠い。布団の中で少しだけ伸びをして——

「……？」

違和感。右腕が重い。見る。

「……まふい？」

「すう……」

いた。ヨルの腕を抱き枕みたいに抱えて、まふいが寝ている。

「なんで!？」



まふいの目が開く。

「……おはようございます、ヨル」

「おはようじゃなくて」

「？」

「なんで私のベッドにいるの？」

「昨晚、ヨルが『眠いならここで寝れば』と」

「言ったけど！」

確かに言った。昨日の夜。話している途中で眠そうにしていたまふいへ、何気なく言った。だが——

「普通、隣で寝る！？」

「……いけませんでしたか？」

まふいが少しだけ寂しそうな顔になる。

「……………」

ヨル、弱い。



「……いや」

「はい」

「ダメとは言ってないけど」

「では問題ありません」

ぎゅっ。再び腕を抱かれる。

「ちょっ、まふい」

「あと五分」

「珍しいね!？」

「昨日ヨルが言いました」

「何を？」

「たまには甘えなさい、と」

「……」

ヨルは昨日の自分を恨んだ。



「まふい」

「はい」

「もしかして味を占めた？」

「……」

「まふい？」

「あと四分三十秒です」

「誤魔化した！」

朝食。まふいのご機嫌だった。非常に分かりにくいがヨルには分かる。

「……」

「♪」

「まふい」



「はい」

「機嫌いいね」

「通常通りです」

「嘘つけ」

「通常通りです」

「口元ちょっと笑ってる」

ぴたっ。真顔になる。

「通常通りです」

「もう遅いよ」

ヨルが笑う。その瞬間、また口元が緩む。

「ほら」

「……ヨルが笑わせるからです」

「私のせいなの？」



「はい」

「じゃあしょうがないか」

「しょうがないです」

完全に甘やかしている。

午前。ヨルは大食堂の一角にあるソファ。まふいも同じソファ。ただし。昨日までとは違う。距離。ゼロ。ぴったり。肩と肩が完全にくっついている。

「……まふい」

「はい」

「近くない？」

「昨日より二センチほど近いです」

「把握してるんだ……」

「はい」



ヨルが少し横へ移動する。まふいも移動する。ヨルがさらに移動。まふいも移動。

「……」

「……」

ヨルが端まで到達。もう逃げ場がない。まふいが隣に座る。

「捕まえました」

「何のゲーム！？」

「ヨルが逃げるので」

「ちょっと試しただけ！」

「逃がしません」

「怖い怖い」

そう言いながら、ヨルは笑っている。まふいはそれを見逃さない。

「……嫌ではないのですね」



「え？」

「私が近くにいること」

「まあ」

ヨルは少し考える。

「もう慣れた」

「……」

「何、その顔」

「嬉しいです」

素直。あまりにも素直。ヨルが逆に照れる。

「……そういうの普通に言うようになったね」

「ヨルには言っていたいいと思いました」

「誰に教わったの？」

「ヨルです」



「私かあ……」

昼。ヨルが料理をしている。珍しく簡単な昼食を作っていた。
まふいは隣。

「まふい、そこ危ないよ」

「はい」

一步下がる。三秒後。一步戻る。

「戻ってる」

「無意識です」

「そんなことある？」

ヨルが作業を続ける。すると、背中にこつん。

「……？」

まふいが額を預けていた。



「どうしたの？」

「待っています」

「普通に椅子で待てない？」

「ここがいいです」

「料理しづらいんだけど」

「では離れます」

まふいが離れようとする。その瞬間、ヨルが服の裾を軽く掴んだ。

「……」

「……」

二人とも止まる。ヨル自身も無意識だった。まふいがゆっくり振り返る。

「ヨル？」

「……」



「離れますが」

「…………別に」

ヨルが目を逸らす。

「そこにいていいよ」

「……！」

「ただし動かないでね」

「はい」

まふい。過去最高レベルで嬉しそう。

「そんな嬉しい？」

「はい」

即答。ヨルの顔が少し赤くなる。

「……ほんと素直になったなあ」



昼食。向かい合わせ。ヨルが一口食べる。

「うん、美味しい」

まふいも食べる。

「美味しいです」

「よかった」

「ヨル」

「ん？」

まふいが自分の皿から一口取る。そして、ヨルの前へ。

「どうぞ」

「……」

「……」

「まふい」

「はい」



「それ、私が作ったやつ」

「はい」

「私の血にも同じのある」

「はい」

「……」

「……」

スプーンは引っ込まない。

「食べてほしいの？」

「はい」

「……あー」

ぱく。

「どうですか？」

「自分で作った味」



「そうですか」

満足そう。

「何だったの今の」

「やってみたかったので」

「……どこで覚えたの」

「秘密です」

「絶対誰かに変な知識吹き込まれてる」

午後。ヨルの部屋。ヨルはベッドに寝転がってスマホを見て
いる。まふいは隣で本を読んでいた。珍しい。

「まふいが本読んでる」

「はい」

「何読んでるの？」



ぱたん。即座に閉じる。

「秘密です」

「怪しい」

「秘密です」

「見せて」

「いけません」

「なんで？」

「いけません」

ヨルが手を伸ばす。まふいが避ける。

「見せてって」

「ヨルでも駄目です」

「えー」

ヨルがさらに手を伸ばして——ぽすっ。体勢を崩す。まふいの肩へ。



「……」

「……」

ものすごく近い。目が合う。数秒。

「……………」

ヨルが先に目を逸らした。

「ご、ごめん」

離れようとする。しかし、袖。掴まれている。

「まふい？」

「……もう少し」

「え？」

「このままでも」

まふいの声が少しだけ小さい。いつもの絶対的な忠誠を示す声とは違う。ただの女の子みたいな声。

「……」



ヨルは離れるのをやめた。

「しょうがないなあ」

「ありがとうございます」

「五分だけね」

「はい」

五分後。

「まふい」

「はい」

「五分経ったよ」

「まだ四分五十九秒です」

「絶対嘘」

「私の時計では」

「時計持ってないでしょ！」



そして、ヨルは例の本を発見した。まふいが飲み物を取りに行った隙。ベッドの上。

「……これか」

表紙を見る。

『大切な人との距離を縮める100の方法』

「……………」

ヨル、沈黙。ページをめくる。付箋だらけ。

『一緒に食事をする』

済。

『同じものを選んでみる』

済。

『肩を借りる』



済。

『少しでも素直に甘えてみる』

済。そして、次のページ。

『手を繋ぐ』

未。

「……」

ヨルが本を閉じる。その時——

「ヨル」

「うわっ!？」

まふいが帰ってきた。

「……見ましたね」

「いやこれは、その」

「見ましたね」



「……はい」

まふいの顔がみるみる赤くなる。

「忘れてください」

「いや無理でしょ」

「忘れてください」

「まふいでもこういう本読むんだね」

「忘れてください！」

珍しく声が大きい。ヨルは笑いを堪える。

「ごめんごめん」

「……」

まふいが本を抱えて俯く。

「だって」

小さな声。



「私は……分からないので」

「何が？」

「こういうことが」

ヨルがまふいを見る。

「ヨルのそばにはいたいです」

「うん」

「ですが、それ以外を知りません」

「……」

「どうすればヨルが喜ぶのか」

「まふい」

「どうすれば、もっと近くに——」

その時、ぎゅ。まふいの手が包まれる。ヨルの手。

「……ヨル？」



「本なんか読まなくても」

ヨルは少し照れながら言う。

「これくらいなら普通に言えればいいじゃん」

手を繋いでいる。まふいが固まる。完全停止。

「……」

「……まふい？」

「……」

「おーい」

「…………ヨル」

「ん？」

「今」

「うん」

「手を」



「繋いでるね」

「……」

まふいが本を見る。ヨルを見る。本を見る。ヨルを見る。

「達成しました」

「言い方！」

夕方。廊下。二人で歩く。まだ手を繋いでいる。

「まふい」

「はい」

「もう部屋出たけど」

「はい」

「手」

「はい」



「いつまで繋ぐの？」

「ヨルが離すまでです」

「私に丸投げ！？」

「はい」

ヨルが手を見る。まふいの手。離そうと思えばいつでも離せる。

「……」

でも、離さない。

「まあいっか」

「はい」

まふいがほんの少しだけ握り返す。ヨルも少しだけ。握り返した。まふいが横を見る。

「……ヨル」

「何？」



「いえ」

「？」

「何でもありません」

嬉しそう。

夜。再びヨルの部屋。

「今日はもう自分の部屋で寝なよ？」

「……」

「その顔やめて」

「何もしていません」

「めちゃくちゃ寂しそうな顔してる」

「していません」

「してるって」



沈黙。ヨルはため息。

「……今日だけね」

「！」

「今日だけだからね？」

「はい」

「明日は自分の部屋」

「はい」

「絶対？」

「善処します」

「覚えた言葉の使い方が悪い！」

ベッド。二人で横になる。今度は昨日より少し距離を空けている。

「……」

「……」



一分。

「ヨル」

「なに？」

「遠いです」

「近いよ」

「遠いです」

「五十センチくらいしか離れてないよ？」

「遠いです」

「……」

ヨルが少し近づく。

「これで？」

「もう少し」

「要求増えてない？」



さらに少し。

「これで？」

「……はい」

満足。

「おやすみ、まふい」

「おやすみなさい、ヨル」

電気を消す。暗闇。数分後。

「……ヨル」

「んー？」

「寝ましたか？」

「今寝ようとしてる」

「……」

「どうしたの？」



少し間。

「今日」

「うん」

「手を繋いでくださって、ありがとうございました」

ヨルが目を開く。暗くてまふいの顔はよく見えない。

「そんなことで？」

「私には『そんなこと』ではありません」

「……そっか」

ヨルは布団の中で手を伸ばす。探して、見つける。まふいの手。ぎゅ。

「……！」

「じゃあ」

ヨルが眠そうな声で言う。

「寝るまで繋いどく？」



返事がない。

「まふい？」

「……ヨル」

「なに」

「大好きです」

「……………」

今度はヨルが固まった。

「急に言うなあ……」

「言いたくなりました」

「……そっか」

「はい」

沈黙。そして、まふいの手を握る力が少しだけ強くなる。ヨルも握り返す。

「……私も」



「？」

「まふいのこと、大切だから」

「……」

「だから安心して寝なよ」

「はい」

まふいが目を閉じる。しばらくして、規則正しい寝息。ヨルは隣を見る。

「……ほんと」

小さく笑う。

「甘えんぼになっちゃったなあ」

でも、手は離さない。むしろ。眠ったまふいの方へ少しだけ身体を寄せる。

「……おやすみ」



その夜。まふいは最後まで知らなかった。先に手を繋いだのもヨル。最後まで離さなかったのも——ヨルだった。

